



聖德太子御一生記繪抄

下



聖徳太子御一生記繪抄下

南海浮沉水香

推古三年村妻土佐國の南海尔夜をく光もの
 有り鳴事雷乃如く三十日許経て淡路鳴尔
 着く鳴人其新尔変て焼尔甚と香一といつり
 太子此由聞しめして御使を以て向と申尔
 鳴人即其香木を獻を大さ一圍長さ八尺五
 太子御覽あつて大尔悦ひおひ則奏したま



恭導奉持

はく是これ沉水じんすい香かあり南なん天竺てんぢく國こく乃なほ南海なんかい北岸きつせん
尔これ何なにる木きなり世よ木き至いたり冷ひやむる亦また尔また其その諸もろ乃すなは
蛇へび以もつ木きを繞まむを双ふた人に世よ木きを初はて矢やをいし
彼この木き射い附つけ並な目め印いん也なり冬ふゆ蛇へび去いる後のち彼
木きを斫きり採とり其その実み之の鷄けい舌げつ其その花はなハ下した子こ其
脂あぶら多おほ量りやう陸りく又また木き乃すなは水みづ尔また沉しずん久ひさきを在あり沉水
香かと号ごう又また久ひさかきき法はふを淺せん香かと号ごう天てん皇わう佛ぶつ
法はふを興おこし佛ぶつ像ざうを造つくるを乃すなはかゆ尔また梵ぼん天てん帝たい釋しやく

其その德とくを感かんじ香か木きを漂たふ送そうりを乃すなはかゆ尔また乃すなはか
のこのまふ天てん皇わう大だい尔また悦えつむを乃すなはひ百もも濟さいりを乃すなはか
造つく佛ぶつ二ふた尔また勅ちよくして觀くわん音おん乃すなは像ざうを造つくるにめ
乃すなはか今いま吉よし野の比ひ蘇そ寺と尔また安あん置ちすることなり

法興寺无遮會

推古四年すいこしよんねん此この夕ゆふ々々土月つちつき法はふ真しん寺と造つく宮みや成せい就じゆ乃すなは時
太子たいし奏そうして无む遮しゃ會えを設たまへり乃すなはか
夕ゆふ一いつ乃すなは紫雲堂塔しゆんどうたつの上うへ尔また其その像ざう又また其その色いろ又また色いろ

ト安^{やす}川^が々^々或^{ある}冬^{ふゆ}龍^{りゆう}鳳^{ほう}人^{にん}畜^{ちく}此^{こゝ}形^{かたち}尔^{みづか}見^み尔^み身^み尔^み良^よ久^く
ク^ク西^{せい}去^き尔^に太^{たい}子^し合^あ掌^{しやう}一^{いつ}見^み送^{おく}り^り由^{よし}此^{こゝ}
寺^{てら}八^{はち}天^{てん}尔^に感^{かん}應^{おう}あ^あ川^が々^々比^ひ祥^{しやう}何^{なに}り^りと^と悦^{えつ}せ^せ尔^に
と^と如^{ごと}り

百濟國阿佉太子来

推古五年乙亥四月百濟國威德王乃彼王子
阿佉^{あび}と^とし^し尔^に来^{きた}り^り調^{てう}を^を獻^{けん}を^を尔^に阿佉^{あび}曰^い
世^{せい}尔^に聖^{せい}人^{にん}在^あり^り由^{よし}願^{ねん}く^く八^{はち}拜^{はい}せん^んと^とも^も尔^に太^{たい}子^し

聞^き一^{いつ}百^{ひゃく}々^々直^{ちく}尔^に御^ご殿^{でん}へ^へ引^ひ入^いせ^せ由^{よし}尔^に阿佉^{あび}則^{すなは}
太^{たい}子^し此^{こゝ}御^ご顔^{がん}を^を熟^{じゆく}見^みる^る次^{つぎ}尔^に左^さ右^う乃^{すなは}諸^{しよ}子^し
足^{あし}乃^{すなは}當^{たう}年^{ねん}を^を見^みる^る即^{すなは}起^たり^り再^{さい}拜^{はい}一^{いつ}次^{つぎ}尔^に慈^じ
上^{かみ}へ^へ下^{くだ}り^り右^{みぎ}乃^{すなは}膝^{ひざ}を^を地^ち尔^に着^つ合^あ掌^{しやう}恭^{こう}慕^ぼ敬^{けい}一^{いつ}
て^て曰^いく^く救^{くわう}世^{せい}大^{たい}慈^じ觀^{くわん}音^{いん}菩^ぼ薩^{さつ}妙^{めう}教^{きやう}流^{りゆう}通^{つう}
東^{とう}方^{ほう}日^{にち}國^{こく}四^し十^{じゆ}九^く歳^{さい}傳^{でん}燈^{てう}演^{えん}說^{せつ}大^{たい}慈^じ大^{たい}悲^ひ
敬^{けい}禮^{らい}菩^ぼ薩^{さつ}覺^{かく}唱^{ちやう}尔^に此^{こゝ}時^{とき}太^{たい}子^し御^ご目^めと^と合^あ掌^{しやう}眉^{まゆ}
間^{かん}より^{より}白^{しろ}き^き光^{くわう}明^{めい}を^を放^{はな}す^す尔^に阿佉^{あび}ま^まと^と再^{さい}拜^{はい}

去太子左右尔語り終ふハ彼冬昔
家弟子ありとのまふとるり

甲斐又國獻驪駒

太子諸國尔命して良馬を求む尔數
百貢中尔甲斐國の馬尔四脚白き驪駒
あり是神馬ありそと止るるそ後御試
尔彼馬尔先一東の方へ行ゆ尔舍人調子
磨獨御馬乃右尔從ふ直尔馬雲中尔

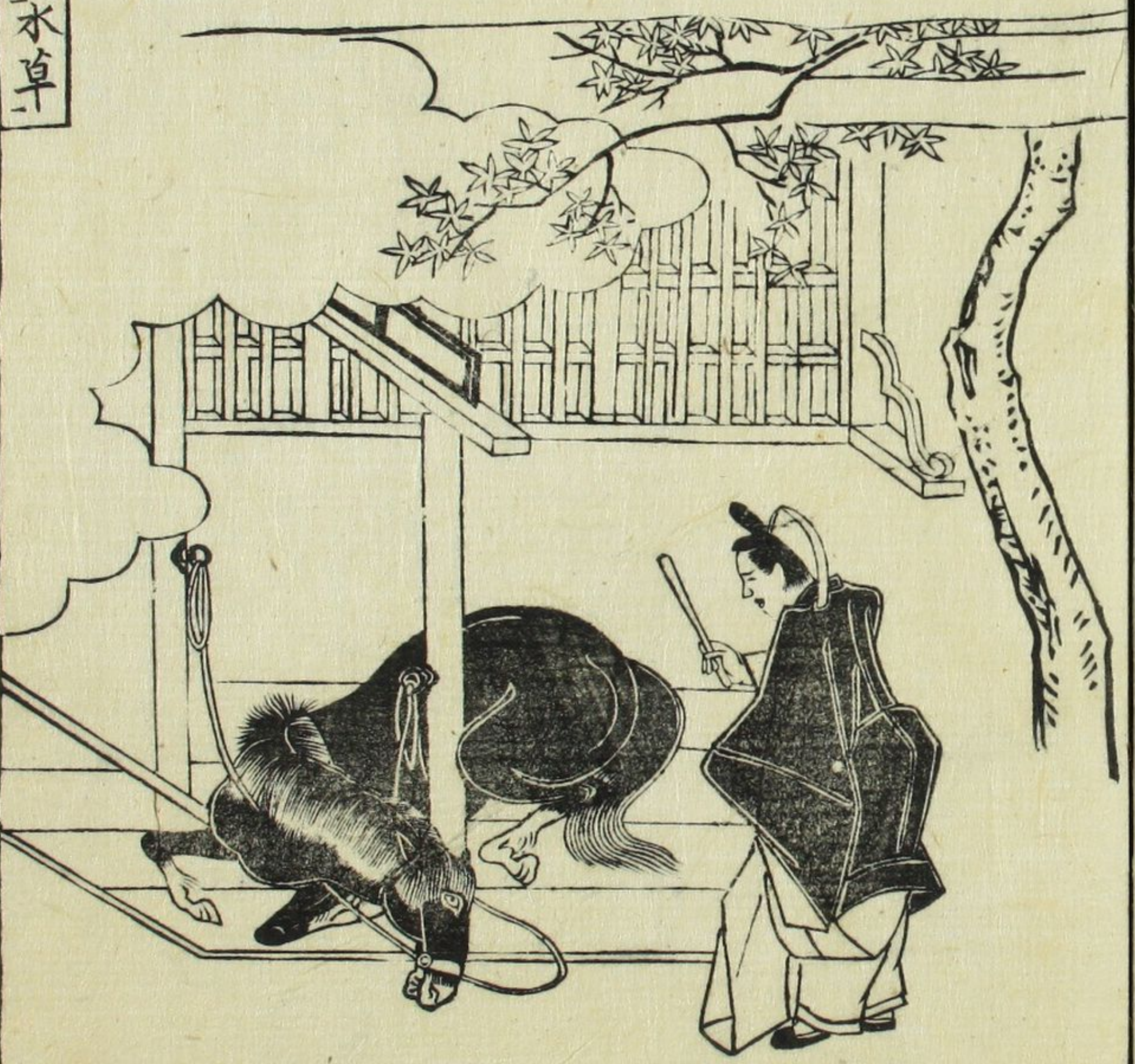
今衆人見そ太子驚く交あり三日を過て
響を迴せ御歸あせぬ太子左右乃
人々尔語てのまはく吾は馬尔驕て雲を
蹠霧を透るそ田土れ嶽尔ありそしそり
信濃尔行く花事雷電乃とくそ
三越越前越中を經そ今歸日來るそ如り
麻呂汝波を忘る吾尔隨ふ定尔忠士あり
空御捕美あせぬ磨啓てまうそさく意

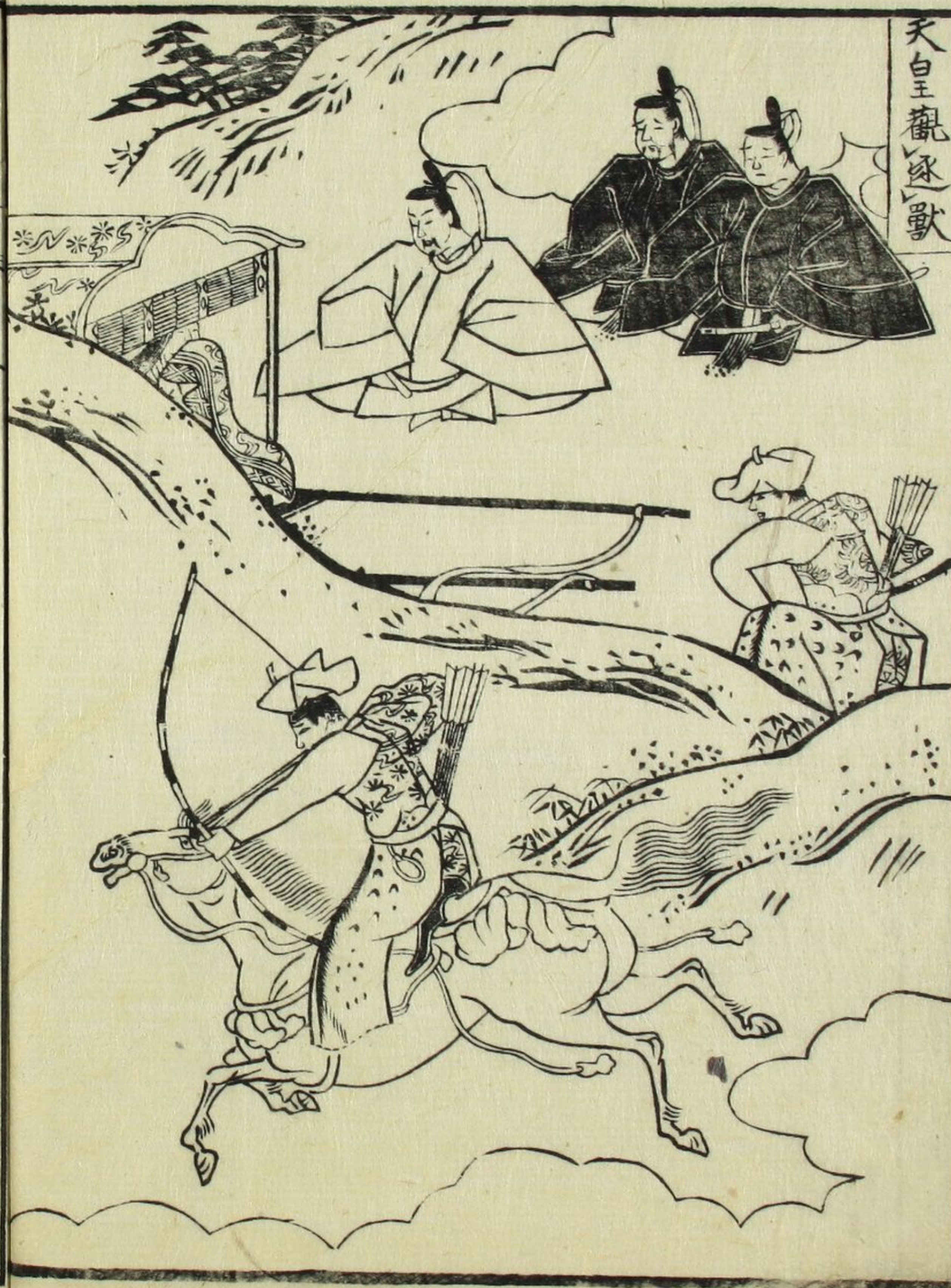
空を履む 猶陸地を歩するが如く
 猶も唯諸山を足る小皆脚下ありと
 みゆく大尔弄う一弄き思ふよを
 上ーとあり

百濟獻駱駝等

推古七年の妹八月百濟國より駱駝一匹
 驢一匹羊二頭白雉一隻を貢とて獻
 太子奏すのこまふ是比白波土乃獸あり

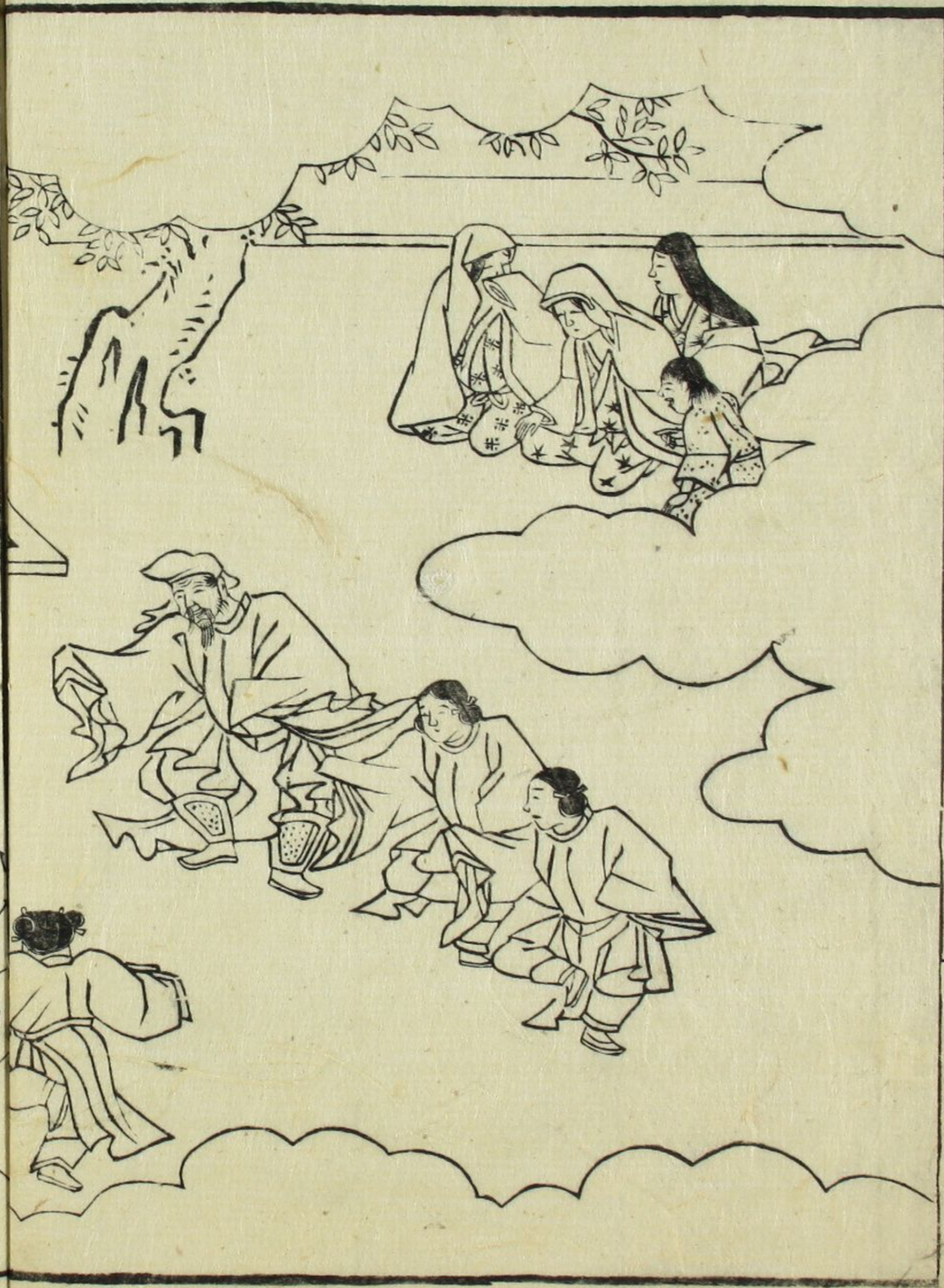
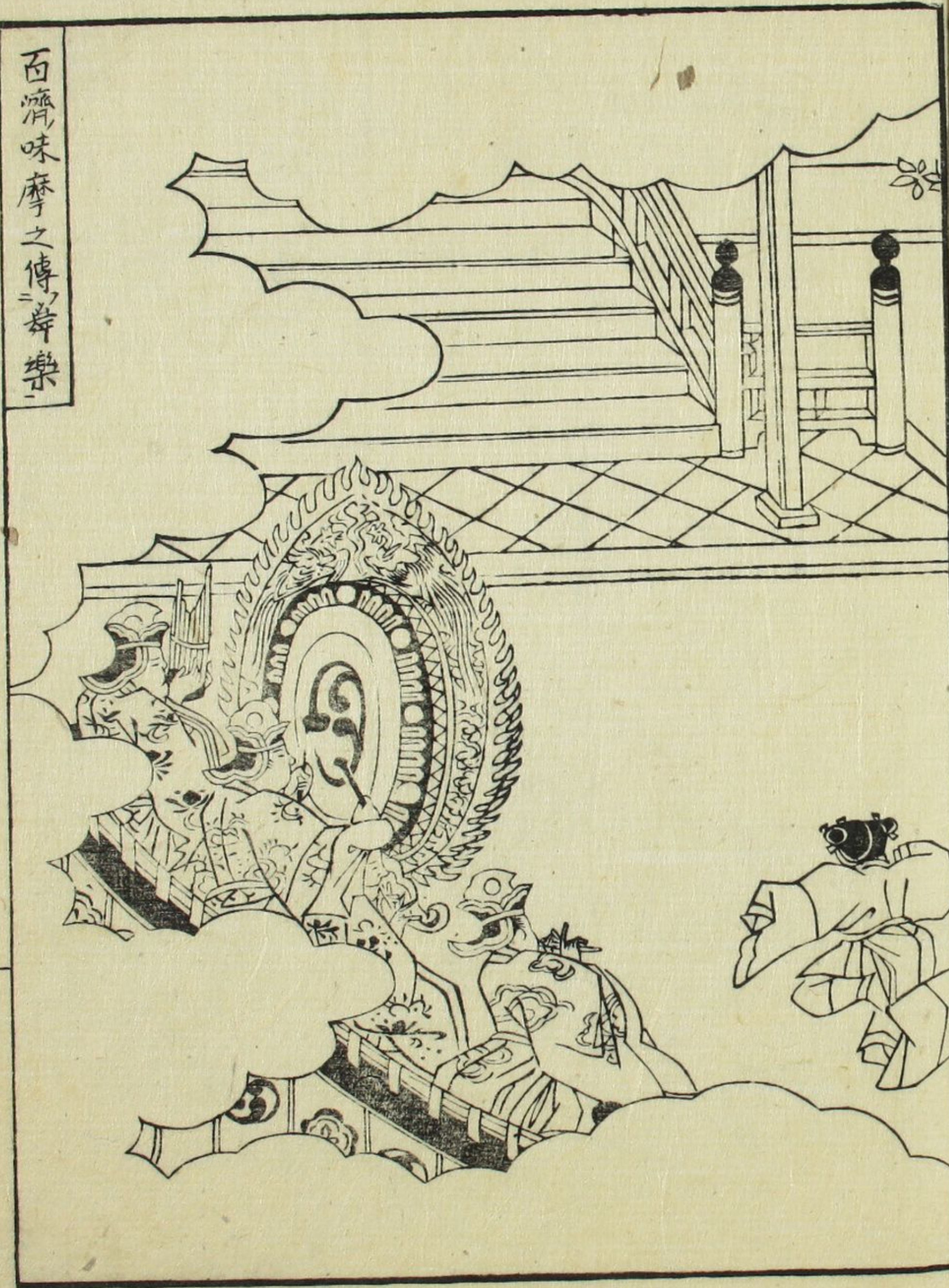
驪駒不與水草



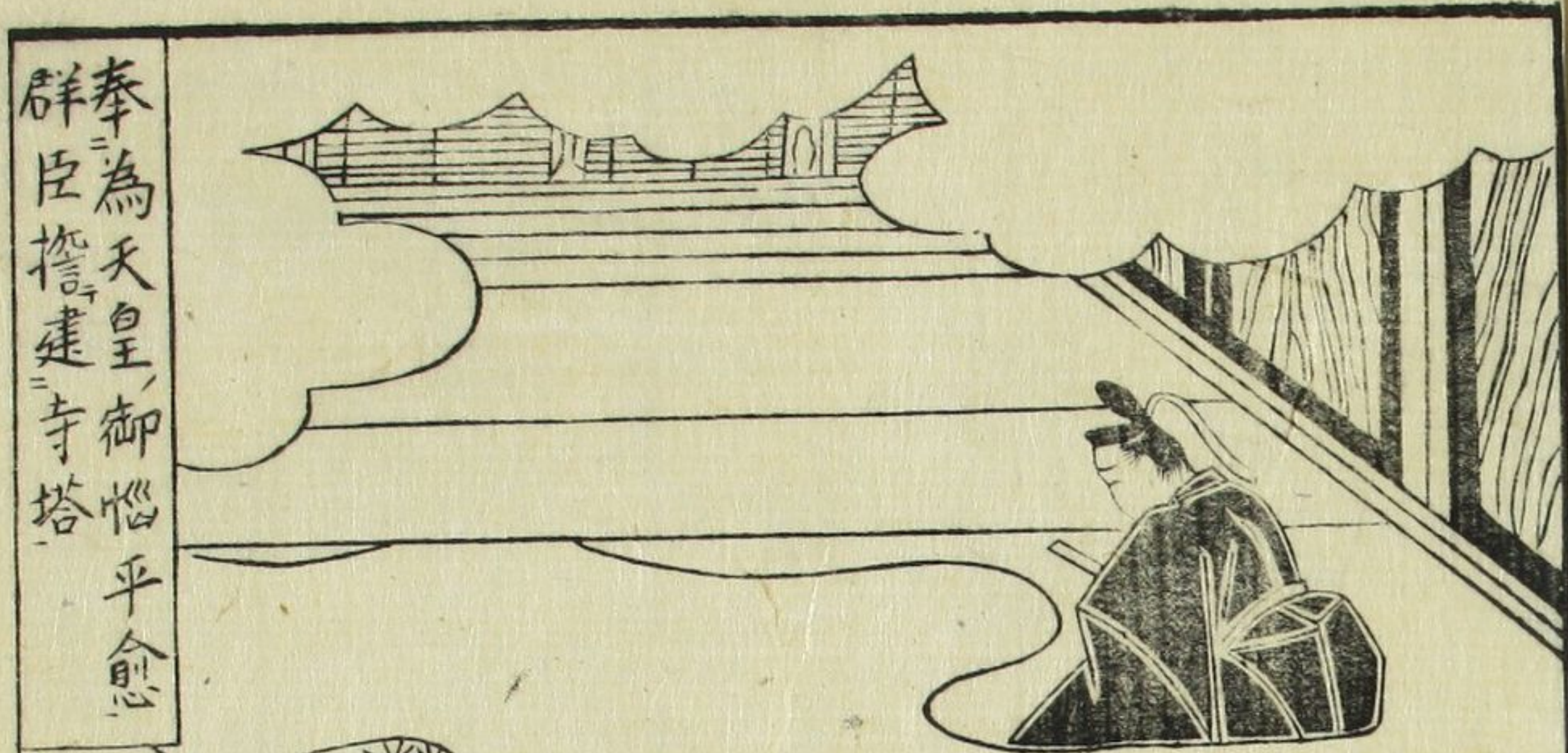


天皇觀逐獸

百濟味摩之傳樂

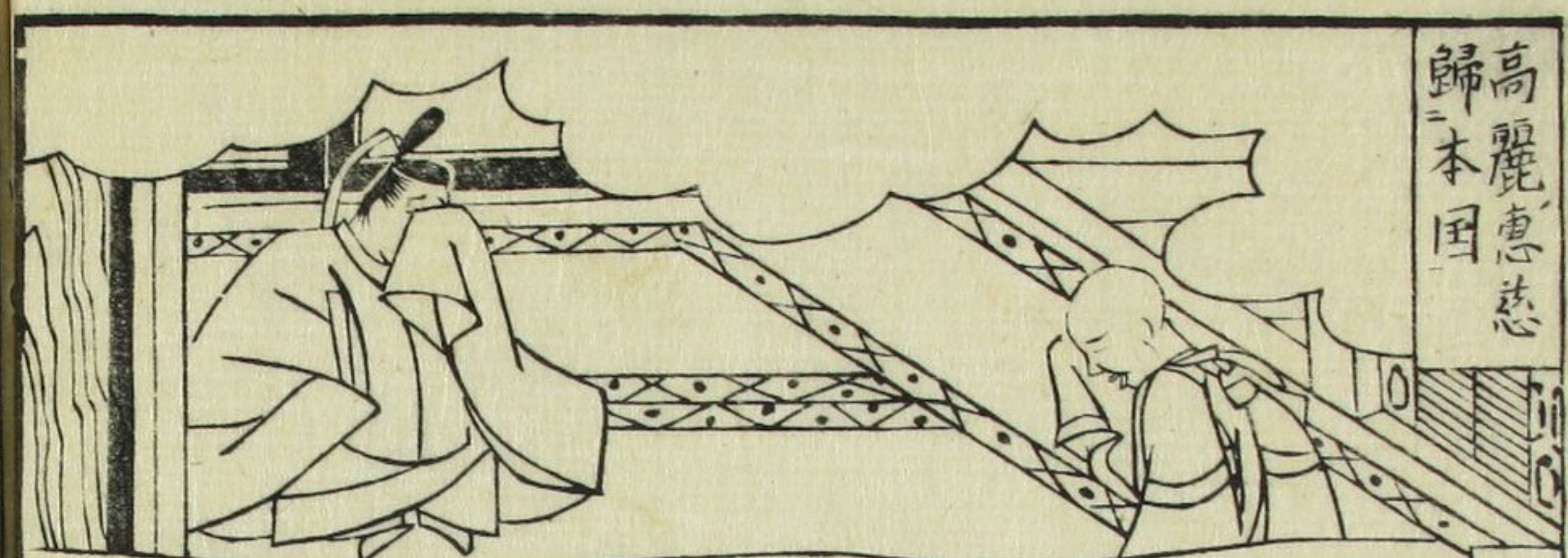


奉為天皇御惱平愈
群臣擔建寺塔



逢片岡山飢人

高麗惠慈
歸本國



牡大辭折鹿之脰



九

太子近遷化語后妃



應勅復講勝鬘經



然も白雉ハ鳳乃類をりとて稱一の名をり

官軍伐新羅

推古八年乃委任那國を新羅國より攻る由

を詔へ來る於是勅して阿部臣穗積臣を

將軍として二萬餘兵を以ち新羅を伐め

始し阿部將軍新羅の城又城を拔新羅大

尔恐く又六城を割き獻し降するの由

免して軍を解て官軍歸朝を然尔後

復新羅より任那を侵す中急を承朝尔
詔依之再び高麗百濟の兩國を以て任那
を救しめ申す太子此のさまへく新羅ハ乾
撓乃如しとのさまりとなす

新羅捕竹間牒

前年任那を救しめ申す承朝尔翌年秋九月尔
至つて新羅より日本へ簡牒使者来り
對馬國より是を捕へ来り太子下知しぬひて

上野乃國へ流罪を以て申す太子

来目皇子伐新羅

推古十年春二月再新羅征伐乃勅尔より
来目皇子 太子乃 大將軍として二萬五千乃
軍勢を領して突向するを以て昔欽明
天皇新羅を討つ復任那を封建す
御遺詔あり然尔近年新羅乾撓乃情尔
して動をもれ任那を侵す於是再征伐

乃勅命ちよくめい王わう將軍しやうじゆん癸みづのへ向むか尔の山やま太子たいし御ご
對たい顔がんの侍しやう奉ほうりてい之後のち將軍しやうじゆん筑つく此こゝ系けい尔の到いたるまふ
系けい漸しん病びやう一いつ少すく太子たいし聞きるる左ひだり右みぎ乃すなは人ひと之の尔の
のまままはく新しん羅らの奴やつ等ら將軍しやうじゆんを厭いと魅みを早はや
て波なみ士し尔の渡わた事ことを得えととのままま終つひ尔の明あき年ねん
二月にがつ筑つく此こゝ系けい尔の不ふ死しにたぬぬととぬぬ

太子議作兵具

太子たいし此こゝ命めい尔の山やま大おほ指さし及および鞞しやく旗き幟しやくを調しらふ侍しやう

太子赴太秦

太子たいし御ご三さん十三じゅうさん米まい此こゝ秋あき八はち月げつ秦しん乃すなは川がは勝かつを召めい
詔みことづかひのままま吾われ昨きのう夜よの夢ゆめ尔の北きたの方かた又また六む里り
去さて一いつ乃の美み邑むら不な到いたるる楓かへ林りん乃すなは下くだ尔の不ふ死しにたぬぬ汝なんぢが
親おん族むく吾われを食たべすとと思おもふふとと夢ゆめ覺さるるりり也や
のままま川がは勝かつ頭かぶ首くび一いつとと啓あきらめめるる二ふたれれ別わか別わか臣しん
か邑むらありと太子たいし此こゝのまままはく然しかハ今いま吾われ彼かの
地ち尔の姓しやうんんと即すなは駕かを命めいしし尔の時とき尔の川がは勝かつ

先道すはそ夕ハ泉河乃北の頭尔宿しそふ

今乃木津まづ 是あり 太子そ地を御覧あ川く左右此人

く尔れこまはく此地ハ山城國を自 吾死て後二

百五十年尔して一人の釋氏あ川く醍醐乃聖

道みちを崇あがめ寺を建たてるこれ侘尔阿く吾後

身なりと語りそふ又翌日兔途橋乃頭へ

此時冬 川勝乃眷属驕馬めく迎へちまふ又木

郡尔到く山城の紀伊 川勝此一族清養を獻

す陪從二百人許乃人々皆醉飽ぬ太子大尔

御感ありそ夕冬楓野乃大堰尔臨く峰此

園乃下御假宮へ御着あせそふ今の大秦 皆く

御逗留の中侍從の面くへ物語しそふ此地を

相尔今の平安 國中秀そり南冬園多北ハ塞き

東ハ河あ川く前尔流り茂 西ハ山嶽乃上尔

龍窟宅しそ常尔擁護そ愛宕 東尔嚴神

在乃聖茂の 西尔猛靈仰く松尾乃 二百衆の後

一人の聖皇 桓武天皇 都を爰尔遷され釋典を

興隆し苗胤相續して舊軌を墜さず

是四神相應此地あり 今乃平安城とあり 吾此ゆ尔夢

相を感し今此處尔松ふと語り小假宮尔

停り小事十日を経上宮尔歸り多ふと也

天皇勅作文六佛

推古十三年天皇常尔太子の妙説を聞し

召遂尔佛法の不可思議なる事を志ありし

先し大御振云願を發され佛工鞍部の鳥尔

命して文六乃釋迦牟尼佛此銅像繡像各一

軀を造ししめふ然尔御大願の由を高麗大

興王傳聞隨茲し黄金三百金を貢り太子御

感ありし天皇へ御奏聞ありせり厚く謝し

ありし後翌年四月佛像成就し元興寺に

金堂尔安置しし

勝覺曼經御誦説

推古十四年此秋七月天皇太子尔詔みことのりしてのたまふ
諸佛乃所説あまのりハ常尔闻まけ了然尔勝於曼經乃説ま
未具いふじるハ胡王のそひハ朕ちんが前まへ尔おのいく宣のたまく誦説じゆ
一始すまらハ太子麁尾ろび有あり獅子坐しよ尔お登のぼる
御儀おんぎハ僧そうの如ごとくして誦じゆぶる三日さんじつ中なかで音おん見みる
其夜よ長ながき三尺さんせき許ご乃蓮華れんげ雨零あめ方かた三四丈さんじゆの
地尔ち溢あふ明めい且かつ天皇てんかう聞き一ひと先まへ大尔おほ奇きりして
御駕おんかを命めいし御覽おんらん見みけりちり托言たくごんして于地尔寺ちり

塔たつを建たてる小今ちよこ乃橘樹寺たちじゆ是こゝ有あり復また其そののら
太子尔ちよこ勅ちよくしてのたまふ法華經ほふげハ如來にが乃妹あな
義也ぎ是亦こゝ宜まく誦説じゆ一始すまらハ太子謹つんて
受うけさせせぬら困か本ほん此宮このみや尔おのいく又僧またそう此儀このぎ
中なか七日しちじつの間御誦説おんじゆありせぬら尔おの未都山みづ
といいハ山頭さんとう尔おの千佛出現せんぶつしゆげん一ひと由よし所ところて于山このやまを
佛ぶつ陀山だと名なはなすとなり

妹いも子この臣しん使つか大唐たいとう衡山かうざん

前年勝曼法華此二經御誦說の後各義
 疏を御製作ありせぬ然尔本朝へ渡る
 亦乃法華經ハ脱文ある事を志し之
 太子奏てのたまふ臣が先身漢土修り
 時所持の經今尔衡山あり望くハ彼を以
 て將來一誤を比校せん欲はと奏し
 天皇答てのたまふ右之右之意尔任さ
 一志くれども誰の彼とせん哉と太子答ふ

妹子が相合つりと即命しぬ
説曰鞍作の稿 利通事と為と 太
 子妹子尔命てのたまふ大階赤縣乃南江南
 此中尔衡列乃衡山あり
是南嶽 山中尔般若
 其室とりふ亦あり南乃溪の下より山を
 松乃中尔入る事三四里あり
 此同法皆既遷化して唯三軀あり汝宜く
 象名を称して此法服を賜り吾昔所持
 乃法華經一卷を乞受て將來せんと則

妹^{いも}子^こ波^な尔^に到^{いた}る^る 門^{かど}内^{うち}尔^に一^{いつ}沙^{しゃ}弥^み阿^あり^{あり} 唱^{なま}く^く曰^{いは}く
念^{ねん}禅^{ぜん}法^{ぽう}師^し乃^{すなは}伎^ぎ人^{にん}到^{いた}来^{きた}せり^りと一^{いつ}老^{らう}僧^{そう}杖^{じやう}と
第^{ついで}く^くお^お讀^{よみ}く^く二^{ふた}老^{らう}僧^{そう}出^いで^で相^{あひ}顧^{かみ}歡^{かみ}を^を含^あみ
妹^{いも}子^こ三^{さん}拜^{ぱい}し^し法^{ぽう}服^{ふく}を^を賜^{たま}は^はる^る 然^{しか}も^も云^いふ^ふ 詔^{みこと}通^{とほ}す^す
さ^さる^る 尔^によ^より^りて^て 地^ち尔^に書^きし^し 意^いを^を通^{とほ}す^す 老^{らう}僧^{そう}も
亦^{また}地^ち尔^に書^きし^して^て 曰^{いは}く^く 念^{ねん}禅^{ぜん}法^{ぽう}師^し 彼^かの^の 何^{なに}と
号^{ごう}と^と 妹^{いも}子^こ 答^{こた}へ^へ 曰^{いは}く^く 我^{われ} 本^{ほん}朝^{てう}を^を 倭^{やまと}國^{くに}なり^り 東^{あづま}
海^{うみ}の中^{ちゆう} 尔^にあ^あり^りて^て 相^{あひ}去^さす^す 三^{さん}年^{ねん} 尔^にあ^あり^りて^て 行^ゆく

今^{いま} 聖^{せい}德^{とく}太^{たい}子^しい^いま^ま 乃^{すなは}ち 別^{わか}れ^れ 其^{その} 旨^{めい}を^を 以^もつ^つて^て 昔^{せき}身^{しん}
尔^に亦^{また}乃^{すなは}ち 法^{ぽう}華^か經^{きやう}一^{いつ}卷^{くわん}を^を 乞^{こひ}受^{うけ}ん^んと 尔^に事^{こと}
た^たし^しと^と 云^いふ^ふ 老^{らう}僧^{そう}等^{らう} 大^{だい}尔^に歡^かん^んと 沙^{しゃ}弥^み尔^に命^{めい}
一^{いつ} 經^{きやう}を^を 取^とり^りて^て 一^{いつ} 乃^{すなは}ち 漆^{しやく}の^の 篋^{けつ} 尔^に入^いれ^れ 妹^{いも}子^こへ^へ 授^{たま}は^はる^る
且^{また} 南^{なん}峯^{ほう}に^に 石^{いし}塔^{たつ}を^を 指^さし^し 示^しす^す 曰^{いは}く^く 彼^かハ^ハ 念^{ねん}禅^{ぜん}
遷^{せん}化^か乃^{すなは}ち 納^な骨^{こつ}に^に 塔^{たつ} あり^り 今^{いま} 三^{さん}十^{じゅう}六^{ろく}年^{ねん} 尔^に及^{およ}ぶ^ぶと
則^{すなは}ち 妹^{いも}子^こ 是^{こゝ}を^を 拜^{こゝ}し^し 去^さる^る 及^{およ}び 今^{いま} 三^{さん}十^{じゅう}六^{ろく}年^{ねん} 尔^に及^{およ}ぶ^ぶと
を^を 裹^{つみ}て^て 一^{いつ} 乃^{すなは}ち 篋^{けつ} 尔^に入^いれ^れ 并^な 封^{ふう}書^{しよ}の^の 篋^{けつ} あり

妹^{いもうと}子^こ是^{こゝろ}を^と取^とり^て 明^{あき}年^{ねん} 還^{かへ}り^て 来^きり^て 采^{さい}必^{ひつ}く^て 太^{たい}子^し
尔^{なん} 獻^{けん}を^て 大^{だい}尔^に 悦^{えつ}を^せせ^り 夕^{ゆふ}の^ひ 筵^{せん}を^て 披^ひき^て 看^みゆ^る
尔^ま 今^{いま} 利^り三^{さん} 枚^{まい} 名^な 香^{かう} 等^{とう} 有^あり^て 又^{また} 書^{しよ}を^て 讀^よみ^せゆ^る
て 御^{おん} 涙^{なみだ}を^て 垂^たり^て 俛^{みづか}り^て 書^{しよ}ハ^て 御^{おん} 覽^{らん} 後^ご 火^ひ 尔^に
投^なげ^り 下^{くだ}り^て 侍^{さむらひ} 従^{じゆ}の^{まへ} 面^{おもて} 奇^き 異^い 乃^{すなは} 事^{こと} 尔^に 思^{おも}ひ^つけ^り
き^と 如^{ごと} 如^{ごと} ん

太子御魂致衡山

翌^{よく}年^{ねん} 此^{こゝろ} 秋^{あき} 九^く月^{げつ} 太^{たい}子^し 夢^{ゆめ} 殿^{どの} 尔^に 入^いり^て 内^{うち} 内^{うち} より

戸^とを^て 閉^とじ^て 閉^ひき^き せ^り ぬ^る 八^は 日^{にち} 七^{しち} 日^{にち} 七^{しち} 夜^や 尔^に 及^{およ} 不^ふ
皇^{かう} 妃^ひ 及^{およ} 侍^{さむらひ} 従^{じゆ} 乃^{すなは} 面^{おもて} 大^{だい} 尔^に 異^い 乃^{すなは} 惠^ゑ 慈^じ 法^{ぽう} 師^し
此^{こゝろ} 曰^{いは} 殿^{どの} 下^{くだ} 三^{さん} 昧^{まい} 定^{じやう} 尔^に 入^いり^て 取^とり^て 驚^{おど} 乃^{すなは} 事^{こと}
乃^{すなは} 別^{わか} 八^{はち} 日^{にち} 此^{こゝろ} 晨^{あさ} 尔^に 殿^{どの} を^て 閉^とじ^て 乃^{すなは} 时^{とき} 尔^に
玉^{たま} 机^ぎ の^{うへ} 尔^に 一^{いつ} 卷^{まき} 此^{こゝろ} 經^{きやう} 有^あり^て 惠^ゑ 慈^じ 法^{ぽう} 師^し を^て 召^よ び^て
示^し 之^を 乃^{すなは} 吾^{われ} 先^{せん} 身^み 衡^{かう} 山^{さん} 亦^{また} 持^も 經^{きやう} 有^あり^て 去^き 乃^{すなは} 逢^あ へ^り
妹^{いもうと} 子^こ 将^{まさ} 来^{きた} せ^り 乃^{すなは} 吾^{われ} 子^こ 此^{こゝろ} 經^{きやう} 有^あり^て 尔^に 吾^{われ} 頃^{ころ}
魂^{たま} を^て 彼^か 土^{つち} 尔^に 来^{きた} 乃^{すなは} 取^とり^て 来^{きた} 乃^{すなは} 彼^か 脱^{だつ} 乃^{すなは} 此^{こゝろ} 文^{ぶん} 字^じ

是なりと指示しこれ さいしゆふ法師大おほいるおほいきき壽きは
 然尔同年又妹子大おほい階かゝ尔つゐ使つかすつか事こと何なにりり明あき
 年秋九月尔き歸かへ朝あそして太子みへま啓あしてままま
 しくせん臣か復か衡山か般か若か臺か尔か届か三か老か僧か乃か中か
 二か口か既か遷か化か何かりか一か口か存かせかりか臣か尔か謂かくか曰かく
 初か年か汝か孫か謀かくか佗かのか経かをか子か尔か授かすか事か也かり
 而か尔か去か年か秋か子かがか國か乃か太子か青か龍か車か尔か駕かり
 従か者か五か百か人かをか従かへか東かよりか空かをか履かきかありか在か旧
 房かのか裏かをか探かつかくか一か卷か乃か経かをか多かりか又か虚かをか凌
 ぐか去かるか跡か尔か妙か法か善か乃か義か疏か五か卷かをか留かめかる
 少か太子か聞かしか先かしか只か微笑かしてか黙かしか一か語かもかり
 とか形かり

太子逢百濟國僧

推古十七年夏四月百濟國の僧道か放か多か此か十
 人か肥か後か圃かへか流か著かすか太子か此か聖か徳かいかまかるかとか聞
 遣か留かせんか事かをか願かふか太子か聞かしか先かしか彼か僧か也

在斑鳩乃宮尔召入く過去宿身此事を以
向ふ小僧流を垂辭謝しもる体あり

驪駒不喫水草

太子御三十九歳此秋九月驪駒尔召して朝
し小時駒錯く蹄を太子此御足尔當て
もる之後斑鳩尔帰り給ふ尔駒耳を低目
を合せ水草も喫む過を悔ふ尔似たり也
奉七日尔乃ふ太子御使を成してのこまふ

我痛已尔愈より汝早く水草を喫極しと
駒亦尔色あけり目を固き頭を擡水草を
喫事常乃如しと形り

天皇觀逐獸

推古十九年此夏五月又日天皇大和國兔田野
尔御幸何川く鹿人此獸を逐を觀覽し尔
太子諫てのこまふ教生乃罪佛教を何とも
重し論語尔も釣をれども綱せんやをれども

宿を射すといひ釋氏乃不教生成外典の
仁有り伏願陛下永く世事を断れんと天
皇勅てのこま小女主ありて教生を好む朕
が過あり自今以後是を断れんとこのこま小体之

百濟味摩之傳舞樂

推古二十年夏五月百濟國より来り味摩之
やりの者吳國尔おろく妓樂と舞を學ぶり
とふ別が年を集り習ひの始り侍り

逢片圀山飢人

太子或とき科長乃墓所より還向乃御時
片圀山の邊を過るせも尔驪駒進み尔
よりの鞭を加へるふといひ世も深遠遊る
狂太子哀々とのこま小付尔道乃遠尔
飢人卧太子御馬を下て歩るよるせもひ
可憐可憐何人ぞやとのこま小ひく別は
乃御袍を脱て飢人尔を履るひ即御歌

を賜ふて曰く

支那照耶片岡山迹飢而卧其旅人可怜祖

无迹汝成众采耶刺竹之君速无母飯飢而

卧其旅人可怜此御歌乃体夷

飢人首を起さるる答歌を追て曰く

斑鳩之富小川之絶者社我王之御名者忌

目め 时尔飢人の祇面長く頭大尔耳長く目

細く長く内尔金多の光あり又身躰太香

一とて形相人尔異ありと又後御使を以

視みしめ給ふ尔飢人命終せりとよふ太子大尔

悲かなみむひて墓を高く造り埋しめ給ふ大

臣大吏皆譏あざわらむとて曰く殿下此聖徳側

近かし而尔道路尔飢死せり者へ全く卑賤

の者あり然尔殿下御馬を下り彼と語り

詠歌を賜ふて死し及およびも無状厚く葬はらふ

了ゆふハ何ぞやと大尔譏ちあり太子これに聞
し召大夫等尔命トて片置山乃墓を及發
て看届来ると則七大夫等命を受て仕
き棺を開尔彼屍曾て奈し棺内香しき
事世に常尔あは大夫等大尔奪き滅小
ゆ急あは飢人なる事を知り益太子に聖智
乃不可思議を深く歎トまりしと知り其
舊跡今に達磨寺是なり

牡犬啗折鹿之脛

或とき宮池乃鍛師が家此牡犬大なる屏の
脛を啗折あり太子あまを御覽あり舎人
尔命しと放しめゆふ体あり然尔又そ存
彼牡犬鹿乃四脛を悉く啗折く三段
なせり太子怪み思召て爰殿尔入せゆふ尔
東より僧来く告て曰く鹿と犬ハ宿業
あり前世尔鹿ハ嫡妻大冬妾よりしり

嫡妻彼妾が子に腰を折り因て妾怒す
事九百九十九世今千世正尔満足す
告
— 少あり

高麗惠慈歸本國

推古古三年冬十一月高麗乃惠慈法師本
國尔乃太子師次其乃禮を修し厚
禄物を賜ふ法師乃曰く愚僧ハ殿下此弟
子好り何ぞ殿下を以て弟子とせん哉

謝しなむ且涙を流して改く唯
今がごとくして別易きハ人道の常好り今
別きまゝとしくも一天同く覆ふが故尔魂
ハ殿下此前尔位をん望くくハ念淨土尔於
て再會しなむんと太子も御涙を垂き
珍重くことのさまひく別き給ふ侍あり
為天皇御惱平愈群臣執言建寺塔
推古古四年夏五月三日天皇不豫し合ふ

太子大尔愁うきひほろ後願ごらんしのままく
 天皇てんわうれ御命ごのみことを延のべせままハば折ちろて諸の伽
 藍らんを建たてんと群臣ぐんしん大夫たいふ百官ひやくくわんも同どうく寺
 塔たうを建たてんと折ちろ言ごふ太子大尔御感ごきんのゆ極たふ
 命いのちを天下てんか下くだし檀越だんごとならし折言ご願ごらんを
 賜たまふとよし天皇れ不豫ふよ忽たちまち尔平へい心しん
 ぬせふおとなり

應勅おうしつ復ふく誨かい勝しょう曼まん經きやう

推古二十五年しゆきにじゅうごねん此夏四月八日このあつしに天皇太子てんわうたいし尔に勅しつ
 中なかつ先年せんねん勝しょう曼まん經きやうを誨かいし中ふよん己來こ
 天下てんか隆安りゆうあん朕ちんが身みも平穩へいあんありき然しか尔彼の經
 義ぎを思おもふといとも遺ゆわ忘ぼうして折ちろ義理ぎりす
 迷まよふ望のぞくハ太子たいし制衣せいゐ作さく乃な疏文そぶんを以もて復ふか
 朕ちんり前尔まへたらし誨し中ふよんのままふ太子
 辭ことばぬらん則小墾せうこん田だ此宮このみや尔に以もて前の如く
 玉座ぎよくざ乃な下くだふ講讀ごうどくし中ふ大臣以もて下

諸蕃并法師等も玉座近く侍りて聽聞
 して三日おして竟りぬ天皇大悦むせき
 小大臣も奏て曰く儲君は妙辯を拜聴
 妙經乃深理各感通せり大悦ふ
 則天皇大臣お勅し御施として儲君
 年中に雜用二倍おなさしめ奉る太子
 固く辭しおふといは許したまはさふゆゑ
 諸寺お分り施入しおふとあらむ

太子近遷化語后妃

太子御四十七果は冬十月后妃お諒せ
 まふ吾昔漢土お彼りする事六世其
 後東海乃國お佛法を流通せしと今倭
 國の王家お生きたる寶お棟梁し一乘の
 道お已お緇徒お溢まきり然お妙義未
 足らぬといはも位儲君乃身おしり門戸
 お到りて説書しは早く此身を捨

微賤の家ひえんに生なままをまも家きやう入道にんに衆生しゆじやうを
救済きうさいせんと欲ほつす是こゝろに吾われに願ねがひあり必かならず又
百身ひやくしんを經へて彼岸ひがしに到いたるといふこともなら
妃ひき聞きに召めい喚わんを垂たることもなら殿下ごん乃
詔たんにおの事ことをしることもなら唯悲ひしむ
所ところをしることもなら早くたん生におの事ことをしることも
太子たいし復またのこともなら吾早はやくまることもなら
故ゆゑになら兩年にんハま衆生しゆじやうをしることもなら化益けせんとの終はふと

あり

撰津國宰相獻人魚

太子たいし勅しつを奉ほうじて畿内きないにおの事ことをしることもなら所にたん塔を
悉ことごとく巡檢めぐりけんありせぬこともなら近江きんぎやうのふにおの事ことをしることも
國くににおの事ことをしることもなら司啓しきをしることもなら八浦はつら生なま河かにおの事ことをしることもなら
氷こほりさる物ものありと太子たいしにおの事ことをしることもなら是人魚にんぎよ
あり瑞物みづぶつありと各おの國くににおの事ことをしることもなら禍ありとの
まなら後其その四月しがつにおの事ことをしることもなら撰津つ國くににおの事ことをしることもなら宰相人魚にんぎよを

獻^{えん}を太子^{たいし}こそを悪^{にく}んで早^{はや}く取^{とり}捨^すべ
 との^とまふとあり

奏^{そう}舞^ぶ樂^{がく}并^{なり}有^{あり}赤^{せき}氣^き

推^{おし}古^こ廿^{にじゅう}八^{はち}年^{ねん}春^{はる}流^{なが}花^{はな}盛^{さか}乃^{なり}比^ひ斑^{いづか}鳩^か乃^{なり}宮^{みや}へ

大^{だい}臣^{しん}已^い下^げ百^{ひゃく}官^{くわん}已^い上^{じやう}を召^まて淨^{じやう}菜^{さい}乃^{なり}饗^{きやう}を

賜^{たま}ふ唯^{ただ}酒^{さけ}を意^い尔^に任^まをべくと別^{べつ}宴^{えん}二^に日^{にち}

三^{さん}夜^や尔^に及^{およ}べり護^{まも}秋^{あき}九^く月^{げつ}天^{てん}皇^{こう}斑^{いづか}鳩^か乃^{なり}宮^{みや}へ

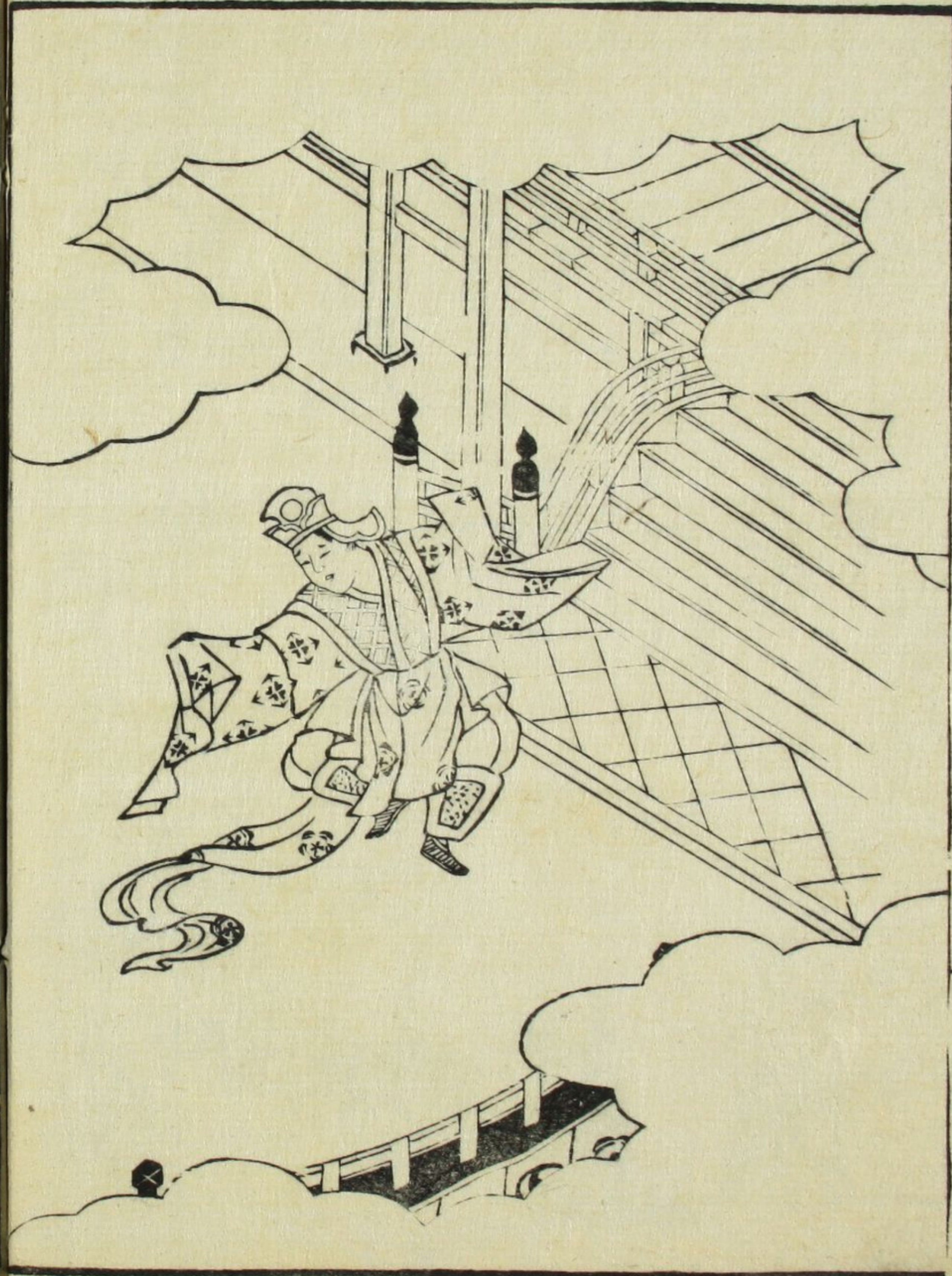
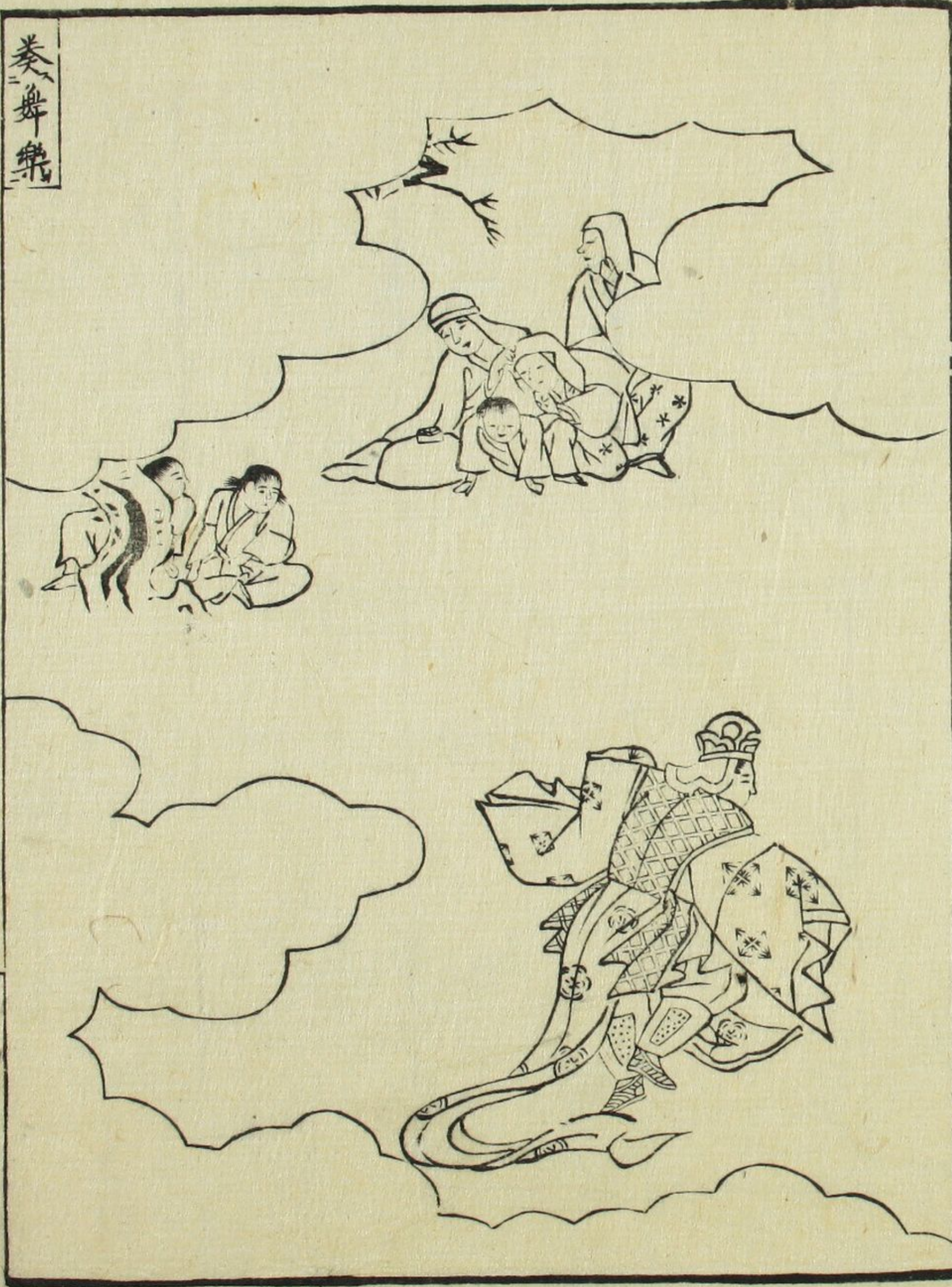
臨^{りん}御^{ぎよ}を群^{ぐん}臣^{しん}各^{おの}州^{しゅう}土^{のど}の歌^{うた}を奉^{ほう}ふ比^ひ時^{とき}舞^ぶ



撰津国宰献人魚

天有赤氣

奏舞樂

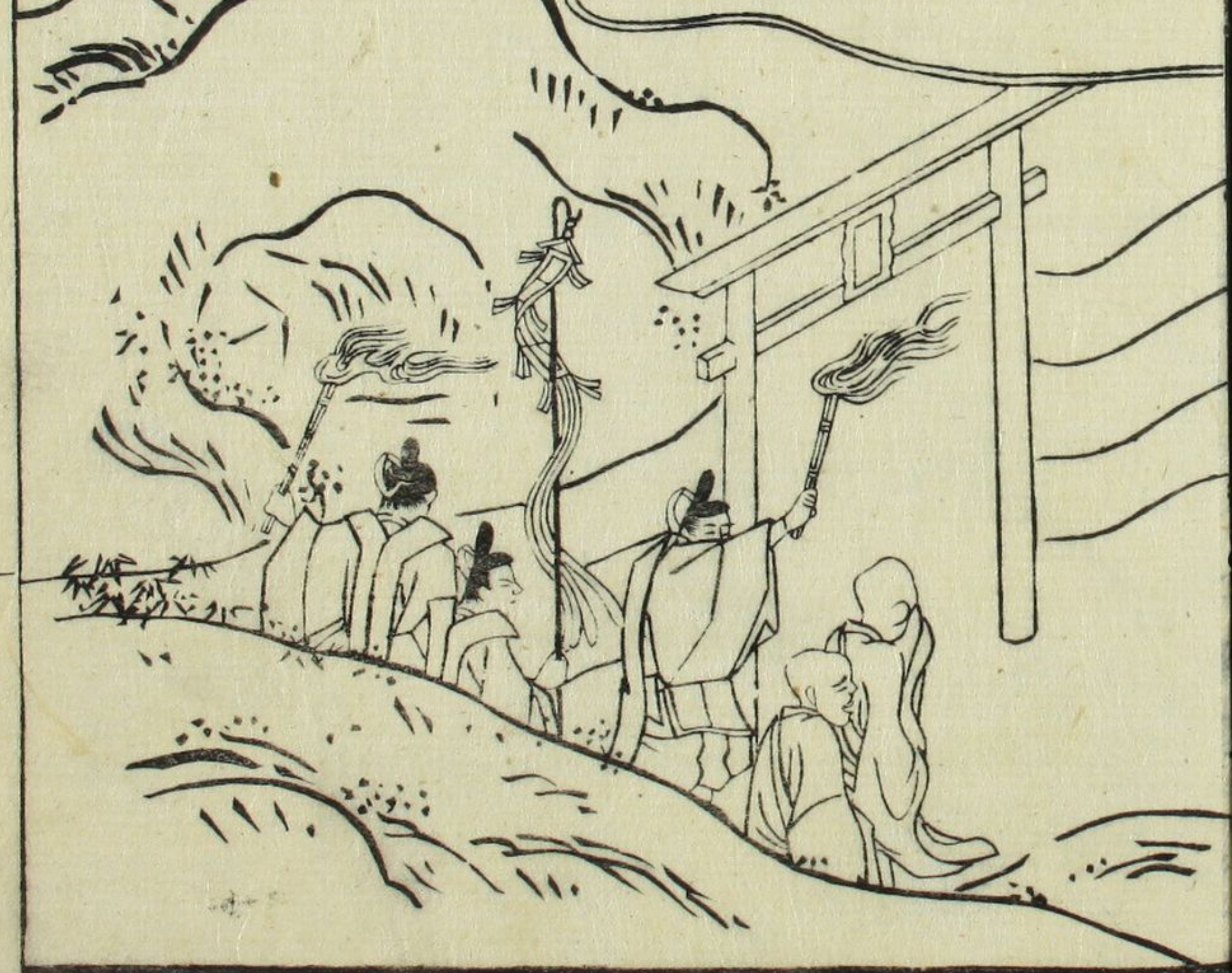


九七

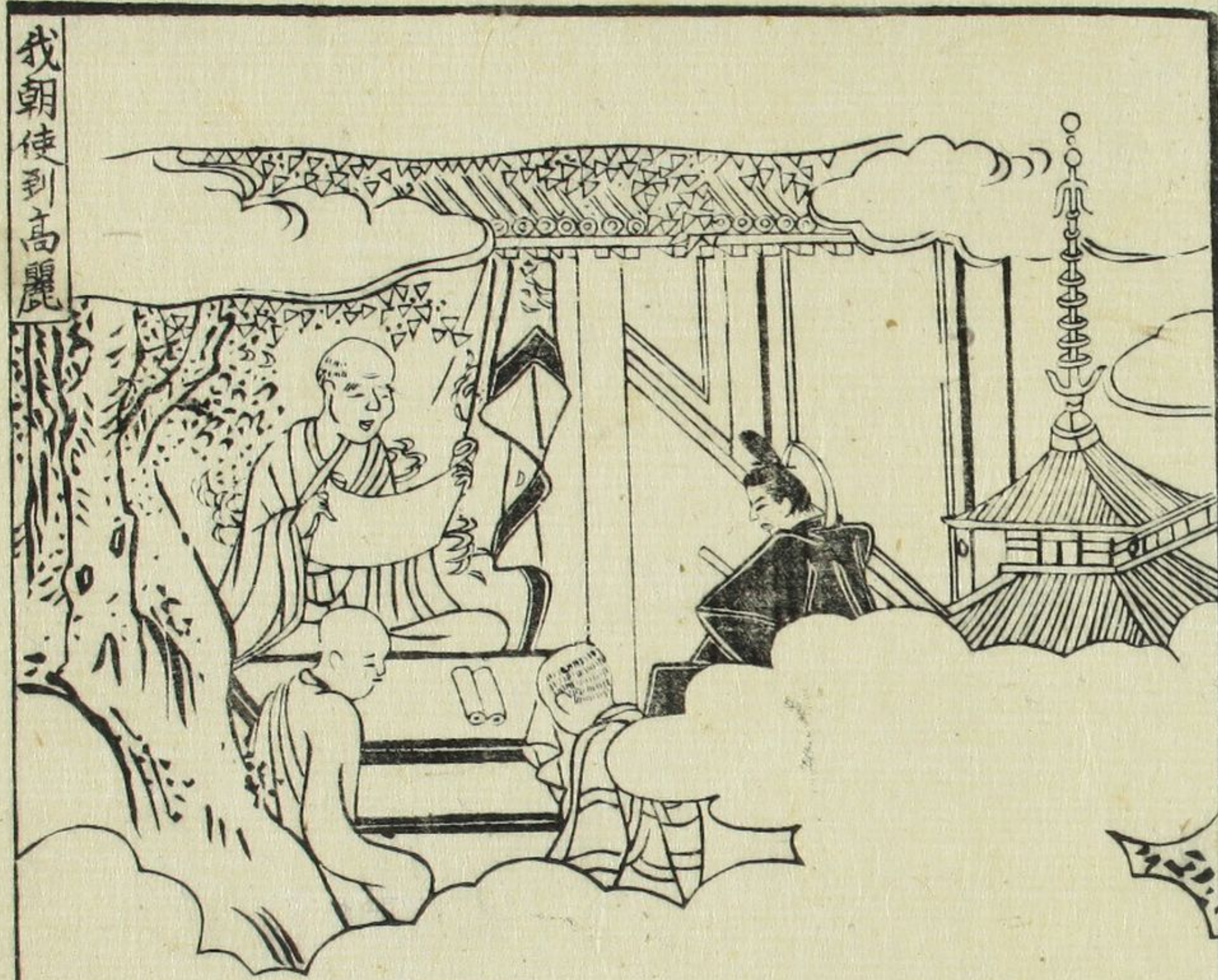
太子及后妃遷化



墓科長墓



我朝使到高麗



台谷雪仙齋藤子行謹寫



三十

太子胤子向西飛去



入鹿燒太子宮

十九

樂がくを奏まうせし一いつ体たいあり

同年冬十二月天あま赤あか氣きあり長ながさ一丈餘いちぢゆう歟

鷄はとり乃を尾お北きた如ごとし人ひとく大おほ赤あか鷲じゆく百濟國ひやくせいこく乃

法師ほふし奏まうして曰いはく是こゝ虫むし屯とん旗はた兵へい乃を象ぞうあり

忍しのぶくハ太子たいし脚あし遷うつ化か乃を後のち七しち年ねん乃を兵へい

あつゝ太子たいし北きた家けを滅めつせん死しとすゝん太子

頤いりせぬ小こ即すなはち大臣だいじん命めいして國くに記き等ら爾に祿ろく

せしめ給たまふりとあり

諸^{あま}神^{あま}を案^{あん}尔^る人^{ひと}魚^{いさな}のあ^あら^らハ太子^{たいし}遷^{せん}化^げの最^{さい}
表^あ形^{かた}り又^{また}赤^{あか}氣^きを逆^{さか}臣^{しん}入^い鹿^か太子^{たいし}乃^な
諸^{あま}王子^{おうじ}を救^{すく}ま^まび^び前^{まへ}相^{さう}ありと云^いふ

太子^{たいし}及^{およ}后^{こう}妃^ひ遷^{せん}化^げ

推^{おし}古^こ北^{きた}九^く年^{ねん}此^{こゝ}去^こ二^に月^{げつ}斑^{いん}鳩^こ乃^な宮^{みや}尔^るお^おわ^わく
太子^{たいし}命^{めい}して后^{こう}妃^ひと共^{とも}尔^る沐^く浴^{よく}一^{いつ}新^{しん}潔^{けつ}此^{こゝ}
衣^き袴^こを服^め一^{いつ}太子^{たいし}后^{こう}妃^ひ尔^る對^{たい}一^{いつ}事^じの
ま^まふ^ふ吾^{われ}今^{いま}夕^{ゆふ} 世^よ日^ひの遷^{せん}化^げま^まべ^べ一^{いつ}子^こも共^{とも}尔^る去^こ

ま^まふ^ふ一^{いつ}と告^つぎま^まひ^ひ一^{いつ}と形^{かた}り對^{たい}尔^る明^あ且^{かつ}
久^{ひさ}一^{いつ}く寢^{しん}殿^{でん}を潤^{うる}きたま^まハさ^さる^るゆ^ゆ忽^と尔^る左^{ひだり}右^{みぎ}の
人^{ひと}悔^{あや}一^{いつ}殿^{でん}乃^な手^てを押^お潤^{うる}く^く尔^る太子^{たいし}后^{こう}妃^ひ共^{とも}
尔^る遷^{せん}化^げト^と云^いふ 平^{へい}氏^し傳^{でん}云^い時^{とき} 大^{だい}臣^{しん}百^{ひゃく}官^{くわん}及^{およ}天^{てん}下^か
乃^な衆^{しゆ}民^{みん}尔^る至^{いた}ま^まて皆^{みな}父^{ちち}母^{はは}乃^な込^こま^まる^る如^{ごと}く哭^な
泣^なま^まる^る 聳^{さう}耳^じ道^{だう}路^ろ尔^る端^{はな}々^々天^{てん}皇^{こう}きこ^こ一^{いつ}召^{めい}
車^{くるま}駕^がを命^{めい}一^{いつ}斑^{いん}鳩^こ乃^な宮^{みや}尔^る迄^{いた}ま^まひ^ひ大^{だい}
御^{おん}聲^{こゑ}を失^しつ^つ一^{いつ}叫^{さけ}び躍^{おど}つ^つ一^{いつ}哭^な一^{いつ}ま^ま

大臣以下是尔敬^{かしら}き^{ひびくちほしほ}捧踊^{ひびくちほしほ}して曰^いく日月^{いちげつ}輝^{ひかり}を失^{うしな}ひ天地^{てんち}も没^{ぼつ}し^{かん}ん^くと皆^{みな}悲^ひ歎^{たん}ありし^{なり}

秘^ひ决^{けつ}云^い后妃^{こうひ}八世^{はつせい}日の夜^よ薨^{こう}じ^す太子^{たいし}ハ

廿一日^{にじゅういちにち}乃^{すなは}曉^{あけ}尔^の遷^{せん}化^げあ^せふ^ふと云^い

葬科長墓

大臣^{たいし}斗^と以^もて御^ご棺^{くわん}を製^{せい}し^も既^も尔^の斂^{れん}ま^ん

す^する^る尔^の御^ご容^{よう}容^{よう}け^けま^まる^るか^か如^{ごと}く^く且^{かつ}御^ご身^み太^{たい}香^{かう}

しく又^{また}之^の馳^かき^き奉^{ほう}衣^い服^{ふく}乃^{すな}如^{ごと}く^く備^び及^{かつ}乃^{すな}御^ご

棺^{くわん}を大^{たい}なる^る御^ご輿^う尔^の並^{なら}へ^へ置^かき^き科^か長^{ちやう}乃^{すな}御^ご

墓^ぼへ送^{そう}り^りま^ま多^た多^た倍^{ばい}従^{じゆ}乃^{すな}人^{ひと}く^く各^{おの}雜^ざ花^けと^と敬^{かしら}奉^{ほう}

釋^{しやく}衆^{しゆ}ハ^ハ讚^{さん}唄^{ばい}し^して^て到^{いた}ふ^ふ道^{みち}乃^{すな}左^{ひだり}右^{みぎ}小^こ百^{ひやく}姓^{せい}

塙^{かき}乃^{すな}如^{ごと}く^く列^{つゝか}じ^じ各^{おの}香^{かう}花^けを^を敬^{かしら}奉^{ほう}或^{ある}是^{こゝ}哭^なし

或^{ある}ハ^ハ佛^{ぶつ}歌^かを^を既^も尔^の御^ご墓^ぼ尔^の葬^{そう}了^{りやう}ま^ま乃^{すな}亦^{また}奉^{ほう}

御^ご葬^{そう}送^{そう}乃^{すな}後^{のち}も^も百^{ひやく}姓^{せい}等^ら為^なり^りて^て遠^{とほ}方^{はう}より

来^きり^り者^{もの}御^ご墓^ぼを^を廻^{めぐ}り^り哭^な叫^{こゝろ}聲^{こゝろ}耳^{みみ}日^ひ夜^やを

之乃五十日乃後漸く減と又鶴乃ふと
色白き異鳥御墓の上尔棲て鳥
遠く返ふ三年乃後事ありと
我朝使到高麗

我朝使到高麗

高麗乃惠慈法師誦説乃席へ奉朝の
御使到つて太子薨一の状を達
法師誦説を停事大尔哭して曰く我
異國尔在とよ断金此公あり今ハ世尔

ありて思ひありと即明年太子の薨
の目を流して自ら氣を滅て命終
ふとなり

入鹿燒太子之宮胤子西方飛去

皇極天皇二年 太子御入滅後 冬十月大臣蝦

夷乃臣病と称し朝せ私尔此糸冠を嫡子
入鹿尔授け又其弟を呼て物部乃大臣

同土月入麻私尔山背廿大兄王子
太子乃
御長男

乃諸王子を救こしまんと欲ほしまること欲ほしまること巨勢の臣
 徳太等とく尔軍兵を免まぬ斑鳩乃宮へ遣つを対
 尔山背王子謀まて獸の骨を寢ま敷ま尔投入い垂
 御兄弟各父子率ひわらく同道より膽駒山
 尔隠かくまるる小軍衆斑宮尔火を放はつく燒やく
 灰の中尔彼骨ほつくを見みんく諸皇子燒死やけし
 尔と謂いて圍かを解と去きる山背乃王子等
 山中尔六ヶ日を経へり尔山北月乃大兄王

のこもふ家いゆる尔諸人を煩わづさんやと即諸
 王子父子兄弟を率ひわらく上二十三人あり山中へ出い
 斑宮尔還かりりゆひ皆塔中尔入大誓願い
 のこまはく吾三明乃智暗く未因果此理を
 識しらん佛乃言を以もつ是を推尔我号宿
 業今賽まるべ一せ五濁の身を捨すて八逆
 此臣尔放はさんん死くハ魂淨土乃蓮ふ入るん也
 香爐を敬さ平い大尔誓云ちゆふ小香煙天尔方

上り三の脚の道と成るに其烟空尔糸一
 皆悉く西尔白ひく飛去りぬ小光明炫燿
 き天華零散一音楽妙小音く世とき
 諸王子自り綾まきく純ゆ小時乃人天を
 仰き看く敬禮一未曾有乃事ありと
 大尔悲歎す入鹿等れ目や黒雲寺れ上
 尔見へ微雷まと聞けりと形り然尔入鹿ハ
 太子乃御子孫を滅一快思ひ父蝦夷尔

此由を告ぐ父手を拵く敬るき歎て曰く我
 族の滅せん事遠くんと云ふ後三ヶ年尔至
 つゝ蕪我臣入鹿傲奢多每君の意日々
 増長一君臣序を失ひ社稷を蔑如一
 朝廷國家恣尔るん天皇是を患ゆあて
 彼を棄んと歎一ゆふとら一も彼勢盛ん
 尔一く濟こと何はきん事を患ゆ小時
 尔中臣れ鎌子れ連藤原氏乃為性忠正なり

則皇子と謀つて天皇大極殿尔御一の
付詔して入鹿を召一の御兼佐伯葛木
二人此連等を伏せ並入鹿を轂平一此連等
劍を以て先入鹿が肩を割傷入鹿怒り
起り走り又一脚を傷御座を轉就て頭
を叩て曰く臣罪を乞ふと天皇詔して
のこまなく何事なく如斯くや皇子平伏
して奏たまはく入鹿ハ山北背の王子等を弑

一又皇位を傾んと遂尔二人をして入鹿
を殺さ一の屍を父蝦夷此臣尔賜小蝦夷も
必誅せし程ん事を乞ひて天皇此國記珍宝
を悉焼す遂尔自殺すよりの逆賊三郎
威込と云云

諸抄按尔倭國尔かい一 天祖降跡已来
神武元年迄崇月を歴る事一百七十八
萬四千七十六年神武元年より敏達元

年近生年數一千百餘歳の同曾て佛
 法乃名字を聞す然尔敏達元年尔至
 て始て救世觀音此應化南岳大師乃
 後身上宮太子出誕一經ひ日本無福
 此衆生權化乃出世を感ト值難き佛法
 尔结缘一三寶乃名字を聞因果乃
 道理を志す既尔かく佛法弘隆するが故
 尔末世此衆生といへども化して淨土尔登

らん奉偏尔是大悲慈母乃恩徳を
 且我法皇此内證外應を尋まハ自
 西方第一此補處より外應ハ昔天竺尔
 ねりて波斯匿王此御女と降誕一胎
 夫人少孺を次尔大唐尔轉化一衡山尔
 佛道修行一乃奉六世終尔南岳思禅
 師より一付達磨大師乃勸諭尔す川
 て第七世を倭國乃王家尔託一種

姓神武天皇此御末用明天皇此太子之

御誕生何々せもふなり

王氏傳云所以生於倭國之王家哀矜百

姓棟梁三宝法華一乘翻傳以降修行託

生歷數十身如今扶桑之國僧尼差多一

乘之道已溢緇徒今於此國妙義未足位

為儲君不得到門戶說今思捨此身命託

生微家出家入道救濟衆生是吾發心誓

願經五百身乃到彼岸女本願緣記曰吾

入滅之後或生國王后妃又或生比丘比

丘居長者卑賤身弘真佛法救濟有情云

聖德太子御一生記繪抄下

天明四年甲辰春原刻
 安政二年乙卯秋求板并補刻

京都六角堂前

福井正寶堂

書肆 丁子屋源次郎

萬家 必要

日用事類彙編

一切横本

全一冊

喜亦杖文章の奉教多岐の事と云ふも多岐の雅俗がさる
 或は至業神やうり或は知んよと云ふ事なるものむと云ふ
 新刊するも又の日用事類彙編に夫らや多岐と云ふ雅俗にて
 又和俗の通用と旨と士農工商の用と備は余亦知量と
 ついとも使わくよと云ふの人又をさかかすは中かきと云ふ
 紙ののりや信守のふ入信の便利と云ふ中かきと云ふ
 雜用するも或は教多岐の事と云ふも多岐の雅俗がさる
 を至業神の通用と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 云々の目録と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 云々の目録と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 云々の目録と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事



書林 六角堂前 丁子屋源次郎

消閑雜記

一時軒著 全二冊

此書の二部 神道中臣の大意 和歌の懐紙の書 唐音と 知るべき天の乃素性 皇國を 守るべき書 訓解 皇國を 守るべき書 訓解 皇國を 守るべき書 訓解

養生主論 全二冊

養生主論 全二冊 養生主論 全二冊 養生主論 全二冊 養生主論 全二冊

校正 神代卷 全二冊

皇都書房

正寶堂 耕文堂

人相小鑑大全 中本 全一冊

人相小鑑大全 中本 全一冊 人相小鑑大全 中本 全一冊

故実年中行交 全三冊

故実年中行交 全三冊 故実年中行交 全三冊

都 子 全四冊

都 子 全四冊 都 子 全四冊

神学教訓抄 全三冊

神学教訓抄 全三冊 神学教訓抄 全三冊

丁子屋源次郎

六角堂 丁子屋源次郎 三條通寺町東へ入丁 同 出 店

精進魚類 四季献立 會席料理秘囊抄

精進魚類 四季献立 會席料理秘囊抄 精進魚類 四季献立 會席料理秘囊抄

東都

須原屋 茂兵衛 丁子屋 平兵衛

攝都

秋田屋 太古衛門 秋田屋 市兵衛 河内屋 茂兵衛 河内屋 平兵衛 河内屋 喜兵衛 丁子屋 源次郎

三 發 行 書 林

皇都

丁子屋 源次郎

742

